

財団法人日本社会福祉弘済会助成事業

第27号
Vol.9-3
2013年1月1日

Dar i Kuching

アジア地域福祉と交流の会 (Asia Community Service & Exchange) 広報紙

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 1-30-9 社会福祉法人福泉内

TEL: 03-3426-2323 FAX: 03-3706-7242 HP: <http://ace-jps.com/>

現地事務所: 8-B Lorong Bukit Lima Timur 2D, 96000 Sibul, Sarawak, MALAYSIA.

発行人: 中澤 健 編集人: 中澤 和代 TEL&FAX: +60-84-21-7864 E-mail: kenkn@tm.net.my

みんなで集った“Murhibahセンター”のクリスマス

撮影者 中澤 健

新しい年、なぜか誕生日や記念日とかより気持ちが変わります。穏やかな年になるようにと願う一方、師走の総選挙の結果を見て、今や日本は大変だと思いました。日本人は、変わってしまったのでしょうか。泰然自若や急がず抑おれの日本人が、性急で怪々「風」に飛ばされ易くなってしまったのでしょうか。郵政解散の小泉旋風、3年余り前の民主の風、今回もメディアの風向き一つで一斉に動いてしまったのは、情報・通信革命の故でしょうか。

独立55周年を祝ったばかりのマレーシアも、今年、間もなく国政選挙です。長く続いた政権が、もしかすると交代?という憶測もあって、しばしば話題になっています。選挙に関しては、信じ難いような話も耳にしますが、兎に角一人一人が国をつくることと自分たちが生きることと必死なことがよく分かります。多民族、多宗教ですから、いろいろが絡み合っていますが、どの民族も家族の絆、家族との「村らん」を大事にしている姿が羨ましく見えます。

既に風に吹かれて道を選んだ日本、これから選ぶマレーシア。どんな一年になるのでしょうか。日本には、落ち着きを取り戻してほしいです。それには、家族やお隣と顔を合わせて一緒に過ごす時間が大事だと思います。社会に重みや深さが戻って来ます。簡単に風に吹き飛ばされない、弱い者を置きざりにしない社会…。日本再生には、「村らん」の温もりを知っていて、相棒以外で動ける“年寄り世代”からの発信が必要じゃないかと、私の初夢です。(健)

I believe in Future (私は信じます)

CFF代表 安部 光彦
(マレーシア サバ州在住)



4年前

私たちCaring for the Future Foundation (以下CFFと略します)は、世界の厳しい立場におかれた「子どもたちの支援」と、未来の社会を担う「青少年の育成」に取り組む団体です。現在はフィリピンとマレーシアで、児童養護施設「子どもの家」を建設・運営し、貧困や家庭の問題などで家族とともに暮らせない子ども達の健全な成長と自立を支援しています。また、そのような子どもたちのための活動を日本と海外の若い青年たちが力を合わせ進めていくことによって青年たち自身が学び、それぞれの目標と共通の問題の解決のために協働する、そのような青少年の育成に取り組んでいます。

CFFの「はじまり」の資料には、「1995年4月15日、前代表でありCFF創設者である二子石 章氏(当時埼玉YMCA総主事)宅に、エドラリオ・カンボス氏(フィリピン・パンガシナンYMCA総主事)、ラモン・デブソイ氏(フィリピン・ホーリーローザリーカレッジ大学教授)の三名が集まり、過酷な境遇にいる子どもたちの支援運動を、将来必ず実現することを互いに宣誓した」とあります。

それから15年、当時何もなかったフィリピン・パンガシナン州の小さな村の山の上には、現在17人の子どもが暮らす「子どもの家」があります。この理念(青少年育成を通して子どもの支援を行う)に



現在

共感した私は、2007年にCFFマレーシア設立準備をはじめ翌2008年にボルネオ島サバ州の小さな村の一角に「CFFマレーシア」を設立しました。2011年度末には4人の子どもが入所し、今後少しずつ増やしていく予定です(最大30人まで)。これらに並行しながらこの4年余りの間に約650人の青年ボランティア達が、何もなかったCFFマレーシアの土地の整地や、道や塀、池など、すべてクレーンやブルドーザーといった重機を一切使わず「手作り」で創ってきました。

私はCFFマレーシアにあるマンゴスチンやパパイヤなどの果樹や、野菜畑、走り回る鶏、土地の中を流れる川や、ホタルの光といった大自然の豊かさの中に暮らしながら、そこに「土地をしっかりとケアしながら使ってくださいね」という未来からのメッセージがあるのを感じます。なぜなら私たちはこの土地を100年後の未来の住人から借りているからなのでしょう。

ここには大切にしている3つの理念があります。一つは前述した「すべて手作りで作り上げること」、二つ目は「環境、経済、福祉の3側面からの持続可能な経営(自立)」、三つ目は「CFFマレーシアは誰のものでもない」ということです。このプロジェクトは、知識と経験と経済力に富んだ一人の人間によって作ることも可能かもしれませんが、そのようなものはそ

の人が亡くなれば廃れます。なぜならそれは「その人のもの=その人だけの功績」であって、お金がなければ誰もその後をケアしなくなるからです。なので、私のように社会的には何の影響も持たないような小さな人間が中心に立てられた事はCFFマレーシアにとっては幸いなことであったように思うのです。つまり、私が無力であるが故に、多くの人々の助けが必須であったという状況が、却って力強い今のCFFマレーシアを作り上げてきたという事です。そこに携わった人々の様々な思いの総体がCFFマレーシアの実態であり、いつもどこかで誰かが何らかのケアをするために自主的に、持続的に関わっているのです。

2005年の“Dari Kucing”に、私はストリートチルドレンとの出会いを通して、「この子たちと共に生きる」ことを書かせていただきましたが、それから7年経ち私の「今」があります。それはストリートチルドレンによって築かれた「今」です。一方、世界のあちこちで、多くのストリートチルドレンは人々に無視され、社会に踏みこまれ続けています。しかし、彼らの誰もが一人一人賜物を持っており一人として欠けることなく「愛されるために」この世に生まれてきたということは、人間の知恵や思いを超えた真実だと私は信じています。I believe in Future (私は信じます)には疑いがどこにもありません。私の心の中に7年前から「I believe in Future」があるのですがこの「信じる心」は、自分で勝ち取ったものではなく、実は、過酷な状況に置かれた子ども達から頂いたものなのであるという事実を証しながら、これからもこの活動に取り組んで行きたいと思います。

ペナンに感謝をこめて・新しい旅立ち

サバ州在住
内海 明美

2012年10月31日私は、ペナン空港を立ちサバ州に向かいました。空港にはアイナ、テリー、スーブンが見送ってくれました。この人たちに守られて2002年から2012年の10年間をACSで共に働くことが出来、たくさんの刺激と影響を受けました。彼らは、ACS活動組織のトップに立つ人たちだけではなく、

未来のマレーシアの障害者福祉を担う人たちでもあります。振り返るとアイナ、テリーとの出会いは、1984年に遡ります。クアラルンプールにあるマレーシアンケアというNGOを紹介してくれたのは、ニュージーランド人のケイでした。当時、私は青年海外協力隊福祉隊員でマレーシア国立知的障害児収容施設で職員の技術向上に向けての支援をして

いました。当時5ヶ所あった国立知的障害者施設の中でも最重度重複障害者施設として出来たばかり(施設は、薬物中毒者の更生施設として使用されていましたが移転したため知的障害児施設として使用することになった)の施設で職員研修のために出かけたときにケイと出会い、この最重度重複施設での活動を通してマレーシアンケアを知りテリー、アイナとの出会いにつながっていきました。

知的障害者ということでは家庭で育てられないという家族の申し出で施設に収容され、職員数が足りない、物資が充分でないということでオムツの交換も決められた時間以外は出来ない状況でした。憤りと哀しさとどこにもはげのない状況を支えてくれたのはこの施設で出会い、共に改善に働いた外国人ボランティアでした。このままでは施設の知的障害者に希望がない、なんとか改善できないかと

社会福祉局局長との話し合いを持ちました。それでも一向に変化はなく、青年海外協力隊員としての任期終了が近づいていました。外国人ボランティア、この施設の改善は、日本の青年海外協力隊員にしか出来ない役割ではないかと考えました。それから約10年間、青年海外協力隊福祉隊員がこの施設で活動しました。私は、協力隊活

ていました。思い出してもなんと楽しい時間だったことか!

そしてアイナは日本の全国社会福祉協議会の1年間の研修に出発し、運命の出会いとなったACS創業者「中澤健」とつながり、彼女はマレーシアへ帰国後、ACS発足に向かったのです。

1999年、私は、滋賀県の琵琶湖の前に建つゲストハウスの運営を任されて日本に帰国し、近辺の作業所に通う知的障害者の人たちにゲストハウスの掃除を助けていただきながら、3年間のゲストハウス運営を終了しました。終了まじかに中澤先生からペナンACSで働かないかとのお誘いを受け、再びマレーシアへ。そして新しい地ペナンで再出発しました。この10年間ACSの理念である知的障害者の願いを第1とする・その願いに寄り添

うこと、を実践しました。そしてその実践を現地のマレーシア人にバトンを引き渡す時が来ました。ACSの未来は多くの挑戦を強いられることでしょう。

マレーシアの知的障害者が「自分らしく地域で暮らすことが出来る社会」その社会の一員としての誇りと責任を支援することが出来ることを確信しています。そのことが現実となる時、施設にいる知的障害者にも未来が開かれていくことを信じています。ACSで出会った沢山の友達の未来を、サバ州のパパール村のジャングルの中に位置する子供の家で祈りに覚えていと願っています。

“マレーシアBoleh! ACS Boleh!”



パパール村・子どもの家へ

動終了後も障害が早期に見られ、適切な療育を受けることが出来れば障害を軽減することは可能

であると信じ、マレーシアンケアで始まった早期療育プログラムのボランティアとして活動しました。手作りおもちゃのワークショップではマレーシアンケアのリソースセンターで働いていたアイナが張り切っていました。沢山の障害児教育従事者や障害児を持つ家族が、一緒に障害児のためのおもちゃを作る機会を企画したのも彼女たちでした。それだけではなく、集った人たちとのネットワーキング、フォローアップがなされ



朝、農場を見まわる内海さん

イバンの人たちの子育て観

中澤 和代

私たちの住むロングハウスの住人は、イバン族の血族で構成されている。また、多くの夫婦が子だくさんである。男女共比較的若い年齢で結婚するようだ。しかも四十代後半で子どもを産む女性もめずらしくない。つまり、子育て期間が長いので、ロングハウスでは自然な感じで、小さい子どもが増えて行く。しかし、「病院がない・医者に行かない・薬のかわりに草やおまじないで病気を治そうとする・ハンモックで揺りすぎる・早期に歩行器に入れたままにする・小学生になってもゴムの乳首を離さない子どもが多い…」など、疑問もたくさんある。

それはそれとして、最近、無邪気に走り回る子どもたちを見ていて、ここでの子育てに関する良い面がたくさん見えてきた。

今回は、幼児期、障害をもって見えるように見えた子どもが4、5年で、驚く程、変化した一例を取りあげ、大人の役割と子どもの可能性について考えてみたいと思う。

時は遡って、5年半程前のことである。ロングハウスで昼夜を問わず、赤ちゃんの泣声がかえっていた。時には強く、時には弱々しく…。私たちは毎日いるわけではないので、気になりつつ、理由を聞くまでには至らなかった。ある日、廊下でおばさんたちが7、8ヶ月の赤ちゃんを囲み、背中に水をビタビタとつけていた。赤ちゃんは、弱々しい声を出していたが側に行ってみて驚いた。顔と言わず体と言わず、全身にできものがあり、しかも膿が流れ出していた。さわってみると高熱である。若い母親に「すぐ病院に行きましょう」と言ったら、「お金がない・車がない」と言う。「心配しないでいいから、とにかく一緒に行こう」と街の知り合いのクリニックを訪ねたら、医者は見るなり「私の手には負えない」と州立病院の救急に連絡してくれた。赤ちゃんはすでに痙攣を起こしていた。こうして、母子は入院し、赤ちゃんは一命を取り留めた。入院期間は3ヶ月余で、その間、私は時々病院を訪ね、医師に面会した。赤ちゃんは、強度のアレルギーで、痒み

がひどく、その治療や清潔、日常生活について、母親教育が必要のため、入院が長引いているとのことであった。

退院後、シングルマザーだった母親は、再婚し、カワンと呼ばれるその子は、おばあちゃんが育てていた。1歳、2歳、3歳、4歳…。

カワンは歩けるようになったがしゃべらず、一向に人と目を合わさない子どもになった。しかも何があっても決して笑わない、表情というものがなかった。赤ちゃんの頃、過酷すぎる痒みを経験したから？急に母親がいなくなったから？私は、経験上、子どもの障害の有無を見る直感みたいなものがあった。「どう考えてもカワンには障害があるね」と、夫ともよく話し合ったものだ。

私の心配は、どこ吹く風？とロングハウスのおばさんたちやカワンのおばあちゃんは嬉しい。カワンが話さなくても、反応しなくても、気にせず悩まず、お構いなしにカワンに話しかけ、可愛がり、時には叱る。私たちのロングハウスは16ドア(16家族)が住んでいるが、全員がカワンの家族であった。お母さんがいなくてもカワンは、淋しくなく不安に撃られることもなかったにちがいない。

それにひきかえ私は…。常にカワンの「できないこと=障害」を意識して、話しかけると、知らず知らずの内にどうしたら反応が得られるか、どう工夫したら彼が興味を示し、目を合わせる事が可能になるか、汲々としていたように思う。そして相変わらず、笑わない、目を合わさないカワンの日常をどこかで「障害児」と決めつけていたのではなかったか？

カワンが5歳のある日、いつも黙っている彼が大声で笑った。何かイベントで、大勢の幼児がロングハウスの廊下を走り回っていた時である。「カワンが笑ってるよ！」私は、驚き、さらに、カワンの笑い声を聞きたいと過ぎたるアプローチをし、逆に彼の用心する顔を見ることになった。おばさんたちは、平気である。特別なことは何もしない。私はしばらくカワンから距離を置いていたけれど、

カワンは、ワークキャンパーが滞在する私の家が大好きだった。夫は、彼を見つけると中に呼び込み可愛がった。そして、彼は、今や6歳、あんなに無表情だった彼が何でも話し、いろんなことに興味を示すようになった。1月から幼稚園に行く。考えてみれば、5歳の1年間で目覚ましい成長を遂げた彼であった。

何も心配せず、ただ、普通の子どもとして、大勢の人たちに可愛がられ、常に人の輪の中にいる日常…。いつも同じ年頃の子どもたちと連れだって遊べる環境…。

調べたわけではないからカワンに障害があったかどうかはわからない。けれども4年弱話さず、笑うこともなく、誰とも目を合わせられなかったことは確かである。

私は考える。「障害って何だろう？」

先進国日本では、早期発見、早期対応、早すぎるカテゴライズ、「専門家」の意見を優先せざるを得ない両親や教師、何より影響力のある社会の目…。本当に子どもは誰も同じように優秀で、人と仲良く「何でもできる良い子」でないといけないのだろうか？それなら母から聞く限り、嘗ての私も未熟児で、発達の遅れた、今で言えば、障害児だったなあと考える昨今、みな様はどう思われますか？



上：5年前、退院後・下：現在のカワン

ACS だより

内海 明美

～アートクラスはじまる～



Weijeさん・描いた作品の前で

ファーストステップの隣に位置するレスパイト・ケアでは、10月からアートクラスが始まりました。ステッピングストーン作業所で、クラブ部門を担当したHooi Kengは、手書きの作業手順を絵文字で完成し、現在でも使用されています。作業手順がわからなくなったら、その絵文字を見て手順を確認している利用者、またコミュニケーションツールとしても用い

られている絵文字。様々な作業の拡大を計画実施してくれました。退職後は、ベナン、クアラルンプールで個展を開き、アーティストとしての道を歩んでいます。彼女の心の片隅にはいつも作業所の利用者がいます。今年もクアラルンプールでの個展を終了するとベナンに戻り、ベナン州アート月間行事に参加して作業所利用者の隠された才能、ユニークな感覚をキャンバスで表現した大作36点出展した内の15点ほどを即売しました。利用者のユニークな作品は年を追うごとに美術愛好家に認められています。彼らの持つ才能をもっと発展させられないか、そして彼らの保護者への理解と、家庭でも趣味としての環境を整えられないかと考えました。もう一

つ、彼らの言葉で表現する限界と私たちの理解の壁を越えて、描くことで彼らの内面を表現することが出来ればと考えたのです。絵を描くことを通して自然に表現されるものがあるとHooi Kengは語ります。ACSはそのことを真剣に取り上げ今回、レスパイトケアの一部を開放し、絵に集中できる場所を準備しました。今までは直立した人物画ばかりでしたが、椅子に座る人、体を曲げる描き方もできるようになりました。表現の素晴らしさに驚くことしばしばです。現在8名（ACS 4名、身体障害児センター3名、学生1名）が、毎週水曜日から金曜日午前9時から4時までグループに分かれて参加しています。近い将来、彼らの作品をACSのギャラリーに展示することが計画の一部に予定されています。（内海明美さんの「ACSだより」は今回が最終回です）



内海明美さん サバへ

ベナンACSの主のように元気で明るく持ち前のユーモアで永年頑張ってきた内海明美さんが、2012年10月31日ベナンを後にして同じマレーシアですがボルネオ島の最もフィリピン寄りのサバ州のNGOに移りました。NGOの名前は、「CFF Malaysia」です。本号2ページにCFFマレーシアの安部光彦さんに活動状況を書いて頂きましたのでご参照下さい。

内海明美さんは、私がベナンで活動を始めるずっと前からの親しい友人だったアイナさんやテリーさんと一緒に10年間、文字通り身を惜しまず、粉骨砕身、東奔西走、本当に頑張りました。私にうるさく言われたこともありましたが、愛犬に亡くなられたり、主に彼女が力を入れていた「ステッピング・ストーン」でも、いろいろがあつたにも拘わらず、めげないで明るく、日本からの来訪者、実習生、ボランティアの面倒もよく見てくださいました。

明美さん、本当にご苦労様でした。そして有り難う。新しい地で、身寄りをなくした子らと意義深い日々を、楽しんでください。また元気で会いましょう。
(中澤 健)

秋の叙勲 そして
バンクミケルセン記念賞受賞知らせ

ACE理事長の中澤健は11月3日文化の日に厚生行政功労ということ、瑞宝双光章を受章しました。本人は、自分は途中で辞めてマレーシアに来たので資格がないのではないかと言いますがこれも理解してご支援下さる厚労省関係者や福祉関係者、多くの方々のご尽力のお陰と感謝しています。

11月17日、デンマークのバンクミケルセン財団（千葉忠夫理事長）と川崎医療福祉大学の共催で、バンクミケルセン賞の授賞式が行われました。

永年ACEの顧問もして下さっている江草安彦先生が「バンクミケルセン栄誉賞」を受賞されました。また、中澤健が「バンクミケルセン記念賞」を受賞しました。本人は、大先輩の江草先生と同じ日に同じ場所での受賞に大感激。「沢山の方々にご支援頂き、マレーシア20年の年に大きな賞をいただけて嬉しいです。この賞も叙勲もこれからさらに頑張れ！という意味と受けとめ、これからも妻と一緒に頑張ります。」と神妙でした。

以上、ACE関係者の皆様にご報告いたします。

(中澤 和代)

じやらんじやらん ちやん かわん♪ (27回)

危ないしましま

上杉 誠

今年の干支にちなんで、へびの話
を少々…。

へびと言うと世界の色々な所で嫌
われ者。その姿、足が無いのに動き
回れる不気味さ、何を考えているか
わからない目、毒がある…等、嫌わ
れる原因は様々です。特にキリスト
教にとっては人間に知恵の実を食べ
るようにそそのかしてしまっただ悪
者としても知られています。キリス
ト教の創始者はへびに嫌な思い出で
もあるのでしょうか…。

ところがこのへびと言う生き物、
他には無い特殊な進化を遂げた結果
があんな姿なのです。足が無いのは、
足が邪魔な環境に適した結果、狭い
場所、隙間、木の上など足があると
いけない場所にも簡単に行けてしま
います。そして、足が無いのに動き
回れるのは、鱗を進化させたから。
おなか側の鱗は実は複雑に動かすこ
とが出来、摩擦力まで利用して、す
いすい素早く動くことが出来るので
す。なんてすごい！身をくねらすだ
けでは、あの素早い動きはできません。
そんな特殊能力を持つへびたち
の食べ物は他の生き物。確実に捕え
るために毒を持ちます。毒で動けな
くしておいて、じわじわと飲み込ん

でいくわけですが、あごの骨は自由
自在に外すことが出来るので、元の
口の何倍にも大きく開きます。そし
て、自分の頭よりも大きな生き物も
食べてしまうのです…。その代り
と言ってはなんですが、一度食べた
ら、しばらくはそれっきり。ゆっく
りと栄養として消化していくので、
頻繁にご飯を食べる必要はありませ
ん。数か月の断食だって、お構いな
し。エネルギー効率がものすごく良
いので、あまりたくさん食べる必要
もないのです。

ボルネオにもたくさんのへびたち
が住んでいて、黄緑、深緑、黒字に
黄色の縞々などカラフルで美し
いへびもたくさんいます。でも、ク
チンの町中にもコブラが堂々と住ん
でいるのにはびっくりですが…。

このへびたち、海の中に住んでい
ます。ウミへびってやつですね。サ
ラワク周辺で良く見られるのは、白
黒縞々の「アオマダラウミへび」。
黄色い顔にくりくりの真っ黒な潤ん
だ目がかわいいウミへびです。と
ころがこのウミへびも猛毒の持ち主。
なんとコブラの10倍以上の強さとか
…。うっかり噛まれたらイチコロで
す！とは言っても、噛まれる事はほ



ウミへび

とんどありません。彼らの持つ強い
毒は噴射して岩の隙間などに隠れる
魚をマヒさせるためのもの。もとも
と噛みつくことを前提としていない
ので、牙も短く、ちょっとした服で
も貫通できないほど。性格もおとな
しいので、彼らの方から襲ってくる
ことはまず有り得ません。とは言っ
ても、あんまりいじめないでくださ
いね。へびだけに蛇の様なしつこさ
でいつまでも追いかけてくると沖繩
の漁師さんが言っていました…。

陸地のへびも、縞々模様のもは
毒を持っていることが多いので、ボ
ルネオで縞々のへびに出会ったら、
要注意です。綺麗だからと言って、
うっかり触ったりしない方が良いか
もしれませんね。

Jalan Jalan cari kawan はマレー語で
友達を探しに行こうの意味です。

ACEに入会のお誘い

*この会(ACE)は…?

アジア地域福祉と交流の会 (ACE)は、人種、宗教、
性別、障害の有無などにとらわれず、「お互いの違い
を認めて支え合う」という考えを基本に、アジア地
域を視野に活動しているNPO法人です。

具体的な活動としては、主にマレーシアで知的障
害児(者)の福祉活動をしているペナンのACSとサラワ
クのRCSの活動を支援しています。

*賛助会員種別と年会費

一般会員 (1万円)	特別会員 (3万円)
学生会員 (5千円)	団体会員 (5万円)
終身会員 (納入1回限り 15万円)	
任意会費会員 (年会費2000円以上)	

*ご入会の方法

ホームページ、E-mail、あるいはFaxか郵便で事務局
にご連絡ください。アドレス、URL、Fax番号は、1ペ
ージ紙名の下にあります。

編集後記

- ・毎年、1年があつという間に過ぎてしまいます。それも
加速度的にスピードをあげているような気がします。年
末になると、今年の重大ニュースは？と夫と共に揚げて
みますが、国際的には、韓国、中国と日本の軋轢が大き
いですね。平和を望みます。国内的には政治の混沌。そ
んな中でも、Dari Kuchingに登場して下さった方々は、
頑張っている日本の人たちでした。心強い限りです。み
な様どうかよい年越しをなさってください (Kazuyo)
- ・節の季節、そんな言葉が頭をよぎる今号の編集でした。
内海明美さんがペナンからサバに移ったこともその一つ
です。一時は寂しいと思ったけれど人の繋がりが広がっ
て行くと思うと嬉しいですね。「ムヒバ」も変化です。
ポーリンを正式にスーパーヴァイザーに据え、私たちは
カピット上流に向けて本格始動、新しい出会いが楽しみ
です。新しい年、皆さんと一緒に元気でじっくり、味の
ある年にしたいと願っています。(Ken)